

図1 札幌市の障害(児)者数
(平成13年4月1日現在)

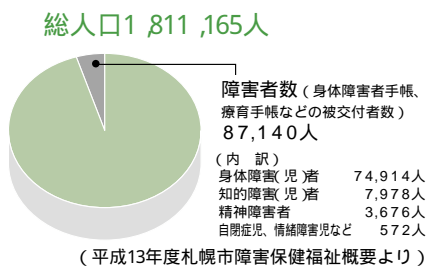
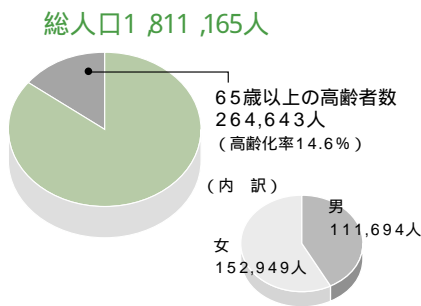


図2 札幌市の高齢者数
(平成13年4月1日現在)



市内には、現在、身体障害者手帳などの交付を受けている障害者が約八万七千人暮らしています。札幌市の人口に占める割合は約四・八%となり、市民の約二十人に一人は何らかの障害があることとなります。

一方、札幌市の人口に占める六十五歳以上の高齢者の割合は十四・六%。市民の約七人に一人が高齢者となっています。平成三十二年には、その割合が二十五%を超え、四人に一人が高齢者となることが見込まれています。

障害の有無や年齢にかかわらず、自分の暮らす街で自由に行動し、あらゆる活動に参加することは、私たちみんなの願いです。市では、障害者や高齢者はもちろん、妊娠中の方や子供連れの方など、だれもが安心して快適に暮らせるよう、平成十年に「福祉のまちづくり条例」を制定し、さまざまな障壁の除去に努めています。

条例の大きなポイントは、官公庁はもちろん、病院、ホテル、デパート、公共交通機関の施設、道路、公園など多くの人が利用する公共施設の整備基準を設けていること。施設を設置する事業主は、出入口やエレベーター、トイレなどを一定の基準に基づいて整備することが必要となります。市では、段差解消や広いスペースの確保など、この条例の整備基準に適合した施設を認証し、シンボルマークを交付。現在、市内では、スーパーや病院など二十三カ所が認証されています。

「急速に進む高齢化などに対応するため、人にやさしいホテル」をキーワードに、施設改修や社員研修を進めています。DPI札幌大会の開催時には、多くの大会関係者が宿泊する予定ですが、万全の体制でお迎えできそうです。この話すのは、京王プラザホテル札幌の総務担当支配人、池田純久さん。京王プラザホテル札幌では、現在、駐車場やロビーなどのバリアフリー化を進めています。改修工事は四月に完了し、市内初の条例適合ホテルとなる予定です。

「急速に進む高齢化などに対応するため、人にやさしいホテル」をキーワードに、施設改修や社員研修を進めています。DPI札幌大会の開催時には、多くの大会関係者が宿泊する予定ですが、万全の体制でお迎えできそうです。この話すのは、京王プラザホテル札幌の総務担当支配人、池田純久さん。京王プラザホテル札幌では、現在、駐車場やロビーなどのバリアフリー化を進めています。改修工事は四月に完了し、市内初の条例適合ホテルとなる予定です。

一方、市では、条例に沿ったまちづくりの推進役として、都心部を中心に公共施設のバリアフリー化を進めています。今年度中には、南北線さっぽろ駅、大通駅でエレベーターと身障者用トイレが完成。すすきの駅でも同様の改修工事が進んでいます。また、昨

年末には、都心部の主要交差点二十カ所を中心に歩道のバリアフリー化を行いました。このほか、新しいアイデアを取り入れた例としては、市役所本庁舎三階に、オストメイト(人工肛門、人工ぼうこう使用者)の方が使いやすいよう工夫された身障者用トイレを設置。独自の工夫を凝らした施設も積極的に導入しています。

一方、ハード面だけでなく、ソフト面の対策にも力を入れています。条例の具体化に向けて、平成十二年に「福祉のまちづくり推進指針」を策定。指針では、障害者や高齢者にとって厳しい冬の生活支援など、市民・事業者・市が果た



だれもが安心して暮らせる福祉のまちづくりを推進しています

公共的施設を中心にバリアフリー化が着々と

条例の大きなポイントは、官公庁はもちろん、病院、ホテル、デパート、公共交通機関の施設、道路、公園など多くの人が利用する公共施設の整備基準を設けていること。施設を設置する事業主は、出入口やエレベーター、トイレなどを一定の基準に基づいて整備することが必要となります。市では、段差解消や広いスペースの確保など、この条例の整備基準に適合した施設を認証し、シンボルマークを交付。現在、市内では、スーパーや病院など二十三カ所が認証されています。

バリアフリーの「バリア」って？ 四つのバリア(障壁)を正しく知ろう

だれもが安心して暮らせるまちを実現するためには、四つのバリアを取り除いていくことが必要です。

- 1 物理的なバリア**
建物や交通機関などで、出入り口や通路に段差があったり、幅が狭かったりすると、車いすの方などは利用できません。
- 2 制度的なバリア**
障害があることで資格が制限されたり、入学や就職の試験が受けられなかったりすると、十分な社会活動ができません。
- 3 文化・情報面のバリア**
目の不自由な方には点字や音声案内などがなく、また、耳の不自由な方には手話通訳や文字情報などがなく、情報が伝わりません。
- 4 意識上のバリア**
障害があることを偏見の目で見たり、逆に、哀れんだりすると、平等な交流ができません。